

やがて官展の大作中心主義が批判され、大正2年以降、寸法制限が設けられることになった(別表2)。

清方もその風潮に苦言を呈していたが<sup>26</sup>、自ら見つけ出した表現様式は、あくまでも趣味的で、独自の画境として制作していたので、「卓上芸術」という言葉は広く知られることなく、現在、清方を紹介する中で語られるにとどまっている。

## 新宿矢来町時代

大正15年、清方は、住まいを新宿矢来町に移した。当初は二階の八畳を画室に当てた。筑波山が見えることをことのほか喜んでいる。六畳の書き物をする部屋がとなりにあったが、昭和7年、建築家・吉田五十八に依頼し二つの部屋を十四畳の画室に改築した<sup>27</sup>。

写真<sup>28</sup>で見ると、右に床の間、左に小窓を配した壁面(西側<sup>29</sup>)は、巾二間<sup>30</sup>、部屋全体の奥行きは三間半である。窓の前に机を置き、読物や書き物をしていた。

左壁面(南側)は奥側から二間の出窓があり、下部は引き戸の物入れ、上部は左隣にある鴨居よりも高く空間が取られ、障子が入る。手すりが付き、薄手のカーテンが引かれ、やわらかな外光が差し込んでいる。出窓の手前、天井との間には扁額が見える。確認できないが、尾崎紅葉筆「御著作所」であろう。出窓の左側には一間の暖簾が掛けられている。

右壁面(北側)は、床の間から半間強のところから障子を張った引き戸がある。

写真では、床の間近くで、出窓を背にして床面に置いた制作途中の作品に彩色を施している。筆、絵皿などの諸道具は、幾つかの盆に入れたまま清方の右手側に並べられている。

以上を図面に落としてみると、別図1のようになる。

矢来町時代は代表作が多い。《築地明石町》(昭和2年)、《七夕》(六曲一双・同5年)、《三遊亭圓朝像》(同5年)、《初雁の御歌》(同7年)、《目黒の栢庭》(同8年)、《にぎりえ》(同9年)、《明治風俗十二ヶ月》(同10年)、《慶喜恭順》(同11年)、《鯛》(同12年)、《朝顔日記》《お夏清十郎物語》(同14年)、《一葉》(同15年)、《蕪》《稚児桜》(同19年)である。

しかし《七夕》は、改築以前であり、壁画《初雁の御歌》は他家を借りて制作している<sup>31</sup>。

清方は、大作はあまり描いておらず、画室の広さが、作品の制作寸法に反映することはなかったようだ。作品の制作空間の他に、画材を置く机と読書や書きモノをする机、あるいはモデルを立たせることもあり、ゆったりとした空間で創作活動を行うことができた。

## 2 吉田五十八設計の画室

清方の画室を手がけた吉田五十八の設計の特徴は、「現代数寄屋」といわれ注目され、画家からの依頼も少なくなかった。小林古徑(昭和11年)、山川秀峰(同11年)、川合玉堂(同11年)、山口蓬春(同15、28年)、梅原龍三郎(同26年)の画室を手がけているが、清方の画室はそれより早く、昭和7年に玄関、客間、茶の間、回廊、書斎などの部分とともに設計されたものである。

吉田の現代数寄屋建築の特徴のうち、画室として用いられたものを幾つか取り上げてみよう。

柱が見えぬようにした大壁を採用し、縦の線が必要以上に視線に入らぬようにしている。引き

戸を全て壁の中に引き入れ、外からは見えないようにした。また、絵の具や水が付いても拭けば落ちるような素材を使った壁、格子の本数を減らした荒組の障子などがあげられる。これらの多くは、清方の画室以後に設計した川合玉堂の画室制作時に考案されたという<sup>32</sup>。

### 3 矢来町と雪ノ下の画室の比較

清方は、戦禍で矢来町自宅を失い、昭和21年、当面の仮住まいのつもりで疎開先の御殿場から鎌倉の材木座へ転居した。

この頃、文芸雑誌『苦楽』が発刊され、表紙絵の依頼とともに、8頁の口絵「名作絵物語」を描いている。清方は《注文帖》や、《にぎりえ》《築地川》の複製を刊行している。

「名作絵物語」は「卓上芸術」である。この企画に参加した画家は、中川一政、木村荘八、中沢弘光、伊東深水、石井鶴三、川端龍子、中村岳陵、山下新太郎、小穴隆一、和田三造、有島生馬、小磯良平、中村貞以、小杉放庵、吉村忠夫などがいる(別表3)。

清方の鎌倉材木座時代の作品は、《朝夕安居》(昭和23年)、『苦楽』表紙絵(同21～24年)、《先師の面影》(同24年)、《小説家と挿絵画家》(同26年)である。「卓上芸術」の作品は、それまで官展には出品しなかったが、《朝夕安居》と題して制作している。

昭和29年に雪ノ下に家を新築する頃には、すでに大展覧会への出品をやめていたので、大きな作品を描くこともなく、広い空間の必要はなかったと思われるが、愛用していた矢来町の画室より少し狭い十二畳の画室を二階に配した。

南側の出窓には、カーテン、障子、ガラス戸、網戸、ベランダ、手すりが設けられている。出窓の下には引き戸の物入れ、障子は半間の一枚戸を縦三分割、横五分割の荒組になっている。この荒組障子は矢来町の画室には見られない吉田建築の特徴である。西側に床の間を配し、床の間の右に窓がある点も似ている。

雪ノ下時代の作品は、《女役者衆八》(同29年)などがあり、出版物は画譜『にぎりえ』、『清方画集』(同32年)、『こしかたの記』(同36年)、『續こしかたの記』(同42年)がある。

### 4 鎌倉清方記念美術館に復元された画室

平成6年に、ご遺族から鎌倉市へ土地建物、作品と資料が寄贈された。これを受けて鎌倉市は美術館構想を打ち立て、「仮称・郷土館・市立美術館」の分館として記念美術館の設置に着手した。

設計に当たり、当初、清方邸を、美術館向けに改築しようとの提案もあったが、消防法や耐久性の点で難しいと判断された。そこで玄関から客間、階段や画室、庭の樹木を残し、生前の雰囲気伝える方向で検討が重ねられた。しかし、客間を残すことで全体の空間が狭くなり、美術館機能を果たされないので、展示室やロビー、ビデオコーナーに割くことになった。

最終的に、格子戸の門は残され、画室は復元されることになり、各部材の再利用をはかれた。二階にあった画室は、入館者を考慮に入れ一階に配置された。画室の位置は以前とほとんど変わらないという。

画室の部材は、一部補修が施されたが、ほとんどが再利用され、出窓、荒組の障子、拝み天井、床の間などそのまま残されることになった。